

コロナ禍の終息を祈る

コロナ禍の中で、私たちにもできることがあります。それは、手を合わせ祈ることです。日々祈ることで、私たちの心や行動も整うことでしょう。お近くの神社で、または、ご自宅にお神札をおまつりして、ご先祖さまと神さまへの感謝と祈りをささげ、日々の生活の平穏を祈りましょう。

コロナ禍での
ご参拝のお願い

神社では感染防止対策をとっておりますが、皆様が安心してお参りできるような協力をお願いいたします。



距離をとってください
KEEP SOCIAL DISTANCE



消毒液を使用してください
PLEASE SANITISE YOUR HANDS



発熱・体調のすぐれない方は
ご遠慮ください
PLEASE DO NOT ENTER
IF YOU HAVE A TEMPERATURE
OR FEEL UNWELL.



マスクを着用してください
PLEASE WEAR A MASK

神棚の詳しいまつり方は
神社本庁HPをご覧ください。
神社本庁ホームページ
<https://www.jinjahoncho.or.jp>



お神札の授与や神棚のお祝いについては、お近くの神社にご相談ください。

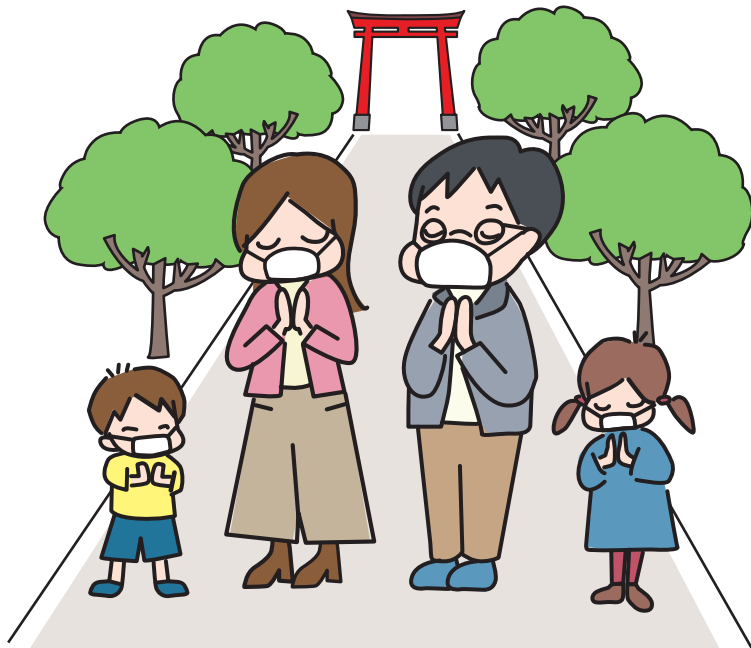
疫病鎮静の祈り

新型コロナウイルスによる感染症が、私たちの生活にこれほど影響を与えると、どれだけの人が予想していたでしょうか。これまで経験したことのない困難に戸惑うばかりです。

しかし、長い日本の歴史を振り返ると、人と疫病との関りは今以上に身近な問題

であったことがわかります。人々は、先のない状況の中で、疫病の鎮静の祈りを神々へ捧げてきたのです。

その先人たちの祈りの姿は、様々な形で現在に伝わっています。このような時だからこそ、私たちは先人の「祈り」に耳を傾け、心をひとつに祈りを捧げましょう。



疫病鎮静の祈り

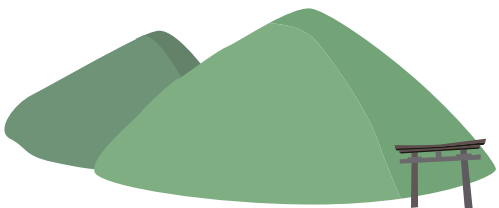
日本の歴史を振り返ると、人々はいつの時代も神へ疫病の鎮静を願い、祈りを捧げてきました。科学、医療が未発達な時代に於いて、その願いは切実なものだったことでしょう。

疫病を鎮めたいという願いは、書物、信仰、祭りといった様々な形で現在に伝えられています。ここでは、その具体的な事例をご紹介します。

書物に記される神への祈り

最も古くたどれるところでは、『古事記』、『日本書紀』に第十代崇神天皇が疫病の流行を鎮めるために神々に祈られたことが記されています。

崇神天皇の御即位五年目、疫病が流行して不穏な世情が続きました。天皇は神々に祈り、神意を伺うと、夢に大物主神（大國主神）が現れ、自らを子のオオタタネコに祀らせれば祟りは鎮まり、自らを子のオオタタネコに祀らせれば祟りは鎮まり、国も安泰だろうと仰せられたのです。天皇はすぐにオオタタネコを探し出し、三輪山の大物主神を祀る祭主としたところ、ようやく疫病はやんで国は平穏を取り戻したそうです。



● 祇園祭

平安時代には、政争により失脚したり、戦乱などで非業の死を遂げた人の怨霊が、人々に厄災や疫病をもたらすと考えられるようになりました。この怨霊を神として祀り、怒りを鎮めて世の平穏を得ようとする「御霊信仰」が現れ、都では疫病が流行るたびに疫神であるこの「御霊」を慰める「御霊会」が行われました。中でも、よく知られるのが「祇園御霊会」で、神輿の渡御や山車の巡行等を伴う盛大な祭りとして都に定着し、現在の京都の八坂神社の祇園祭へと発展していきました。

雄大な祭りとして知られる「祇園祭」の本質は、防疫を願う人々の切実な祈りなのです。



● 大祓の茅の輪くぐり

多くの神社で、六月と十二月に半年の罪や穢れを祓う「大祓」が行われ、「茅の輪くぐり」という茅で作った大きな輪をくぐる行事が合わせて行われることがあります。この輪をくぐると、流行する病にかからず無事に過ごす事ができると言われ、これは『備後國風土記』に記されている蘇民将来の逸話に関わりが深いとされます。

武塔神（速須佐雄能神）が旅の途中に日が暮れてしまい、宿を求めたところ、蘇民将来は貧しいながらも精いっぱいもてなします。その御礼に、家族に茅で編んだ輪を腰に付けるように伝え、今後疫病が流行った時にもその茅の輪を付けていけば、蘇民将来の子孫の証としてみなす。蘇民将来の家族は、言われた通り茅の輪を身に着けることで、難を逃れたということです。

大祓でくぐる大きな茅の輪は、この由緒に基づいて行われています。

「疫神」を祀る

— 信仰と祭り —

神は疫病を鎮めてくださる存在である一方、疫病を流行らせるのもまた、神であると考えられていました。病気を流行らせる神は「疫神」と呼ばれ、人々は疫病を鎮めるために「疫神」を畏れ祀り、時には祓いやることで疫病の流行を防ごうとしたのです。

● 疱瘡神

日本で古代から最も恐れられていた病気の一つに「疱瘡（天然痘）」があります。人々は、疱瘡にかからないよう、またはかかっても症状が軽く済むようにと、この病を「疱瘡神」として祀ったり、村や町から追い出す「疱瘡神送り」などの行事を行いました。

天然痘は医療の発達により現在は根絶されましたが、「疱瘡神」は各地の祠や神社に現在も祀られており、疫病封じを願った人々の信仰を今に伝えていています。



お祭りに込められた願い

このほかに、病を祓う祭りは私たちの身近にたくさんあります。節分の豆まき、そしてひな祭りや端午の節句も、病を防ぎ健やかな日々の生活を願う祈りが込められています。

まさにコロナ禍の中で私たちが直面しているこの状況は、これまでに経験をしたことのない困難な状況といえるでしょう。しかし、このような時だからこそ、先人が願った、祈り続けてきたことに思いを馳せ、私たちも心を一つに祈り、この困難を乗り越えましょう。